リレーコラム 56

キャリアの積み方

― 私の場合

地方病院の小児科から

名寄市立総合病院小児科

堀井　百祐

私は 2001 年に医師となり、大学病院小児科での半年間研修した後、関連病院で勤務していました。6 年目で夫と結婚し、その後 4 人の子どもが生まれました。第 1 子出産後に復帰した 2008 年から、現在の病院で勤務を続けています。

もともと不登校や夜尿、癇癪などの相談をお受けすることはあったのですが、自分の子どもができ、神経発達の分野にさらに興味を持ちました。現在ではお子さんの発達相談の外来をしています。地方病院に長く勤めていると、子どもに関する研修会・学習会に招かれる機会が増え、連携機関との顔の見える関係性が作りやすくなりました。その結果、患者さんにとって小児科以外に頼れる窓口を紹介でき、とても助かっています。地域のこども園、学校や行政の方との連携や、家族支援の機会を通し、お子さんの成長発達をうまくアシストできるようにと試行錯誤しております。

診察では、お子さんの実際の様子や客観的な評価を大切にしながら、保護者の思いや関係機関の情報も連携の中で共有し、お子さんが大人になるまでにどのような対応を必要としているか、皆で色々考えます。考えすぎて、診療が迷子になることもあります。特性の強い神経発達症のお子さんの診療や介入の難しいご家族のお子さんの場合では、すぐには成長の変化に結びつかない事もあり、ご家族や周囲の支援者が辟易し始めていることもあります。そのようなときには、ほかの職種の方の意見を伺ったり、そのことについて考えたり離れたりを繰り返しながら急がず待つことで、良いアイディアが出てくることもあったりします。親御さんや支援者の皆で、励ましあって今できることをお互いに頑張っているよと支えあうこともしばしばです。夫は成人の緩和ケア看護師ですが、私にはない視点を持っているので、時々アドバイスをもらいにこっそり相談に行くこともあります。

患者さんの現状維持ができていることを確認しながら、「一緒にもう少し待ちましょう」と親御さんや支援者とつらく長い見守り期間を経た先に、お子さんたちに良い成長変化が起きていくと、つい泣いてしまいそうな嬉しいことにも出会います。そんなことがまあまあ起こるので、地方病院での外来診療には小児科の醍醐味がつまっている気がしています。小さかったお子さんたちが、思春期になって自我もりもりで久しぶりに外来で会えたりするとついウキウキしてしまいます。自分が患者さんから学ばせてもらったことや、地域医療の中でお子さんの成長発達に関わる喜びや楽しさを、次の世代の小児科を目指す方へも伝えていけたらと考えています。そして患者さんや自分自身を支えてくださっている同僚の先生方や家族へ感謝し、日々診療に取り組んでいきたいと思っています。

【著者略歴】 **堀井 百祐　ほりい もゆ**

小児科専門医
2001 年 3 月　　旭川医科大学卒業
同年 4 月　　旭川医科大学病院小児科
2001～2006 年　関連病院で研修
2006 年　　大学へ異動→結婚→2007 年長男出産
2008 年　　名寄市立総合病院で復帰
2009 年長女出産→2012 年次女出産→2017 年三女出産
以後現在まで名寄市立総合病院 小児科で勤務しています。

～ダイバーシティ・キャリア形成委員会より～

「地域で小児科医を続ける喜び」

ひとつの地域で長く働き続ける小児科医の存在が、その地域を支える大きな力になるということを体現したエピソードをご紹介いただきました。一度きりで終わりはなく、何度も会う回数や時間を重ねる中で、お互いに頼り頼られ、地域での人間関係が深まっていくご様子が伺えます。

すぐには成果が見えない大変なとき、「一緒に信じて待ってくれる人がいる」というのは、お子さんや保護者の皆さんにとってなんと心強いことでしょう。そしてきっと、小児科医がそうした心持ちを維持できるのは、一緒に悩み考える仲間がまわりにいるからではないでしょうか。子どもたちの人生、ひいては地域の子どもたち全体を支える活動に関わったり、仲間と協働したりして見出す日々の喜びが、地域で小児科医を続けるモチベーションの大切な要素であると考えられます。